鈴木商店二代目当主

鈴木岩治郎さんを偲ぶ

金子、柳田を第一線に扇の要の役を果した総帥

毛並み優秀岩坊の愛称

鈴木商店第二代当主鈴木岩治郎は、明治十一年十一月鈴木商店創始者先代岩治郎がまだ街の微々たる一砂糖屋だった時、その長男として生れ、先代没後十六才で鈴木商店成長初期の家督を相続し岩治郎を襲名した。次弟岩蔵もまだ九つか十の頑是ない最中、母よね刀自はこの二人の遺児を立派に育てるのと、鈴木の遺業興隆が彼女へ新しく課せられた大きな重荷であり、まだうら若い四十三の身のよね女は、姫路御城下の西田忠右衛門の三女として界隈での器量良しで育ち、お針も達者、三味線の音も一入冴えていかに勝気だったとはいえ、およそ初めから商才などには至って縁遠い環境に育てられ終には女傑といわれ世界の鈴木商店までに名を上げたのは遺がにだ。この父を持ち、この母に育てられた岩治郎は、大将の愛称で誰からも親しまれた。

鈴木商店の興隆に寄与

東京専修学校を卒え、鈴木商店々員となり一通りの業務を習得するや母よね刀自は理解ある母性愛から掌中の玉岩治郎をロンドンに手放し専ら砂糖貿易の動向調査とその研究に専念させた。時に岩治郎二十四才、英国に駐在する事約二年、帰朝後は海外知識を金子、柳田両巨頭に吹き込んで、鈴木将来の動向を示唆した事も大きく、後枢機に列してからよね母堂を輔けて大鈴木建設に寄与した功労も少なくなかった。

当時砂糖に樟脳に着々地歩を固めつつある前進途上の鈴木は文字通りの旭日昇天の勢で神戸製鋼所の如きは独立前数年の昔に遡って既に鈴木商店から田宮嘉右衛門（現神戸製鋼所相談役）をして経営の衝に当らせていた。住友樟脳を買収し日本商業、東工業、大日本塩業、合同油脂等々矢継ぎ早やの創業に成功するなど八面六臂の活躍を続け、株式会社に改組されるに及んで彼は鈴木商店社長に就任し、傘下に金子直吉を専務に高畑誠一、永井幸太郎、窪田駒吉、高橋半助、平高寅太郎、志水寅次郎、西岡貞太郎を各取締役に、次弟鈴木岩蔵、谷治之助を各監査役に、北浜留松、篠原正次を支配人とする鈴木本陣の新地図は一騎当千の侍を揃え黄金時代を示現した。

これより先き神戸製鋼所の独立経営に当っては海軍少将黒川勇熊を社長に迎え依岡省輔、田宮嘉右衛門両雄の鈴木直系の取締役と列んで吉井孝蔵と袖を連ねて監査役に選ばれた彼はまだ三十四才の若さだった。

彼の行動は後世の教訓

大正四年七月鈴木商店が播磨造船所を掌中に収めたのと相前後して彼は神戸製鋼所の輝かしい社長のイスに就いた。

大鈴木の当主だった彼だが、飽くまで悧恰ぶったり制肘、容嘴などの主人顔もせず、徹頭徹尾金子、柳田識見に信頼したが、社員の賞与など思い切って惜気なく出す事は真先に賛成するなど心から社員思いの慈父でもあり当時既に労使協調の精神は十分のみ込んでいた。何時の時代でも表面に姿を見せず、人を表に立ててその功労を譲る反面、過失は自ら負うという偉大なこの陰徳は一部戦後派の耳の痛い所でもあるは申すまでもなかろう。

真に人間岩治郎を完成

順境に育ち肌触りのよい岩治郎は紅燈緑酒の誘惑も多く、また徹底的に遊び抜きもした。常盤津の妙技に至っては名取りの腕前でもあった。ある人彼に〝遊んでいる隙に鈴木の財産は金子、柳田に横領されて了うぜ〟と忠言したら彼は〝俺の財産は全部使って了った。今の残りは金子、柳田が儲けた金だから皆やっても惜しくないよ〟と大笑した。この話を金子、柳田両雄が聴き伝えて遺がに若旦那の太っ腹には恐れ入る、と膝を打って感激し一層責任を感じた。彼の恬淡寡欲には決して単なる凡庸型でなく若し金子、柳田のような巨頭がいなかったら第一線に大手を拡げたに違いなくまた存分に飛躍し得る十分な素質も持ち合はしていた。彼の晩年の心境は普通人の真似んとして真似の出来ぬ一面を持つにいたったのはこの折花攀柳を上手に活かした賜だが、花街で秘かに茶道の雅趣を身につけた事は世間で余り知られぬ彼の人生修練への一コースだった。須磨に風光松籟を楽しんだ頃は鈴木の大旦那という殻を完全に脱皮して路傍の好々爺となって村民漁夫を心の友として余生を楽しんだ。その姿こそ人間岩治郎の完成を如実に物語るものであった。偶々胃潰腸にかかり、神鋼病院で加療につとめたが不幸病革まり、昭和二十年終戦前一月二十四日波乱の生涯を静かに幕を閉じた。年六十八。

鈴木岩治郎氏を偲ぶ

高畑誠一

鈴木岩治郎氏は鈴木商店二代目の店主として昭和十三年五月、母堂米子刀自の逝去後は名実共に社長として毎日出社、業務を統轄されていたのであった。岩治郎氏は稀にみる趣味の豊富な人で、先づ、壮年時代には当時紳士の遊びとして流行した撞球にしても、その頃四百以上を撞き、今日いうプロ級の腕前を持ち、また競馬に対しても、非常に興味を持たれ、一時は六、七頭の馬を所持して、阪神競馬場は素より淀、小倉の競馬には必ず出懸けられるという熱心さであった。確か

大正の終り頃であったと思う抽籤馬であったが、非常な名馬を手に入れられ、馬名を『奉祝』と称して屡々各地で優勝し、前後僅か数年間に賞金約五万円を獲得、なお、最後には、宮内省の種馬として当時の四万円という高価で御買上げを蒙ったとのことであった。また一方、芸事にかけては、清元延寿太夫に師事し、その高弟として夙に名取となり、清元界でも有名なものであった。同氏はまた食通としても有名で、今日ほど料理の進んでいなかった、明治の終りから大正の初め頃、只料理を味うために神戸から門司まで、フランス・メールに乗船してそのフランス料理を楽しまれたことも再三ではなかった。従って、四季さまざまの料理を自分で調理して、友人を招かれるようなことも度々あった。更に、中年からは、書画に興味を持たれ、例えば菱田春草画伯の如き僅か三十七、八歳で故人となった画家としては、その作品は比較的少ない筈であるが、それにも拘らず、かように多数を手に入れられるには相当苦労せられたものと思う。今日骨董価値として最高の春草ものを、これだけ多く廿数幅も所持した人は恐らく他には見られないと思う。

以上述べたように、趣味道楽にかけては、いわゆる、通人として神戸の有名人仲間でも第一人者であった。従って、岩治郎氏を世間では恰も遊蕩児の典型のように噂される向もあったが、事実は決してそのようなことはなく、非常に頭脳明晰で、思慮深く見識あり、その上、極めて思い遣りの深い人であった。このような性格の人であったから、金子氏の仕事に対しても毫頭干渉されるようなことはなかった。大体、商家の主人として、何事につけても普通人以上によく弁えていながら、かくも、超然と大御所におさまり何事にも干渉しないということは、常人にはなかなか出来難いことで、このことは、岩治郎氏の美点として特筆に値するものと思う。

それでこそ、金子氏はその商才を思うままに発揮して、鈴木をあれまでに大ならしめたものである。しかし、かの昭和二年の世界的金融恐慌時代に遭遇して、さしもの大鈴木も経営困難となり、同年四月遂に閉店の已なむきにいたったのである。

岩治郎氏はその後昭和十八年末頃から胃潰腸の症状が現われ、二十年一月、神戸製鋼の神鋼病院に入院せられ、直に切開手術を受けられたのであったが、手術後僅か一週間にして惜しくも遂に六十八歳を一期として世を去られたのである。

鈴木岩治郎氏を静かに想う

柳田義一

鈴木岩治郎氏は不肖の物心づいてからの恩愛は書き尽くせないものがある。一生徳望の人であっただけに特に目立った逸話等ありそうでないが、没後坊間偶々伝えられた一事は、岩治郎氏の性格を語るに最

も相応はしいものではなかろうか、話は昭和十年前後に遡ったある一夕市内有名士が西常盤に集宴を備された時である。

その中に岩治郎氏も羽織袴の和服姿で座を占められていたのであるが、その隣座にも同年輩近き紳士が侍べられた。共に未知の間柄で初の顔合わせであるにもかかわらず、名刺の交換すらなく宴はいよいよ酣となり御両人肝胆相照され大いにメートルをあげられた訳だが、彼の紳士酒癖というか泣き上戸で男惚れに惚れた岩治郎の羽織袴に遠慮なく頭をもってゆき鼻水やら涙をすりつけられた。岩治郎氏はまたこれを払い除けようともせず彼の稚気をむしろ愛され遂には介抱までして夜宴が果てたという。

後日彼の紳士岩治郎氏なる事を誰かに聞かれてか自責に絶えず威儀を正し前夜の無礼を謝しに態々鈴木邸の門を叩かれた。無論岩治郎氏も大いに喜ばれこれを奇縁に終生交友を続けん事を誓われた。彼の紳士こそ神戸商工会議所会頭榎並充造氏その人であった。

昭和十三年三月、大阪朝日新聞連載「神戸人覚書欄」に語る人として榎並充造が左の文を寄せておられる。

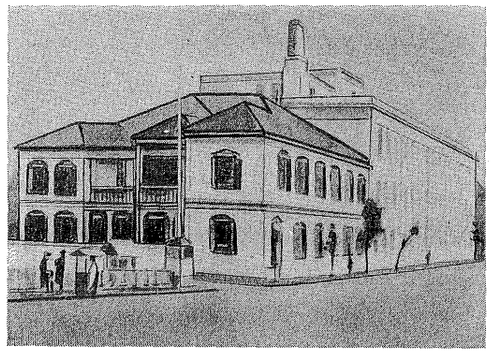
（題名）「高所からにらむ眼」鈴木岩治郎氏

大所高所から物を見るというが、そういった人物は中々見つかるものではない。この意味からいって鈴木さんは神戸財界の一見識といってよかろう、大鈴木商店華やかな頃よそ目で見ると金子氏一人で切り廻しているかに見えたものだ。いつも恐ろしゅう鷹揚に構えていて、その実チャンと大局を見抜いていて人の意表に出るところ等堂にいったものだった。親分幹分の関係はわれわれ日本人の気質に適合して発達したものであるが、最近は人情紙の如しというか、理屈ぽくなって伝統の美点は跡を絶ってしまった形だが、鈴木さんの場合それを見る肚があり大まかな一面が光る。

鈴木岩治郎氏の隠れた事蹟の一つとして特筆したいのは芸術家の後援である。橋本関雪画伯、蔦谷竜岬画伯等共に大家となられる磁石を背後に築かれたというてよかろう。今回中国より来朝の梅蘭芳優の如きは始めて優を日本に招聘、神戸聚楽館の舞台に乗せたのは鈴木岩治郎氏その人である。今から思い合わせこの頃から中国との交友芸術交換を夢見られていたともいえるであろう。合掌

太平経済新報社

新産業新録特集号（昭和三十八年頃）より



大正末期神戸海岸通にあった鈴木商店本店